

2022年3月27日 礼拝説教要旨

詩編講解説教103「神はすべて新しくする」

詩編103：1～5、ローマ6：4～8

詩編第103編は冒頭に「わたしの魂よ、主をたたえよ」とあります。この同じ言葉が2節に繰り返され、最後の22節にもあります。初めと終わりが同じ言葉で括られておりますので、神さまをたたえることがこの詩編を一貫している主題であることは明らかです。「たたえる」と訳された言葉は「ベラカー（祝福する）」という言葉です。これは「賛美（ハレル）」とは違いますので、この意味を汲み取らなくてははいけません。このベラカー（祝福）は、元々「承認する、肯定する」ということを意味しますので、日本語のニュアンスで言うと「賞賛する、ほめる」ということでしょうか。例えば、赤ちゃんが立ち上がってよちよち歩きをした時に「上手、上手！よくできた！」と手を叩いてほめるでしょう。赤ちゃんが立ち上がったことを認めて、ほめてあげる。神さまに向かって「上手！」というのはおかしいですが、言い換えれば神さまの救いの御業に感謝して「よくぞしてくださいました！」と賞賛することです。意味としてはその方が分かりやすいと思います。

しかも、ここでは「わたしの魂よ」とあります。「魂」（ネフェシュ）がここに出てきました。これは人間存在の最も深い部分、その人そのものを表します。また「わたしの内にあるものはこぞって」（1節）の「わたしの内」というのは、「わたしの内臓」という言葉です。体の中、腹の底から、神さまをたたえるということ。ですからこのことが意味するのは、体も魂も全体で神さまをたたえるということでしょう。ここに聖書の示す救いが表現されていると理解してよいでしょう。それは人間のトータルな救いです。精神的な安らぎとか、魂の平安だけではありません。その人の身体、生活も含めて、存在全体が救われるということです。そのことを詩編103編はわたしたちに教えています。

3～5節には全部で六つの動詞が出てきます。「赦し」「癒し」（3節）「贖い出す」「冠を授ける」（4節）「満ち足らせる」「新たにする」（5節）これらはすべて神さまの御業、神さまから賜る恩恵を指しています。言わば恩恵のリストです。しかしこれらはバラバラなことではなく一つの救いを表しているとして理解してよいでしょう。イスラエルにしてみれば、それはこの後6節以下に記されているような出エジプトの出来事を思い起こすことができます。イスラエルはエジプトの奴隷生活から救い出されました。それでも金の子牛を作って拝んだり神さまに背いて生きるイスラエルをそれでも神さまは赦し、約束の地に導いてくださいました。神さまの忍耐と憐れみによってイスラエルは神の民として新たに歩みだすことができました。この救いの出来事を一人の人間が神さまに救われていく過程と捉えることもできます。特に今を生きるわたしたちにとって、この御言葉はイエス・キリストに救われることがどういうことであるのかを雄弁に語ります。つまり教会が伝える福音をこの詩編から確認することができるのです。

何よりその筆頭に「赦し」があります。教会も「罪の赦しを信ず」と告白します。「お前の罪をことごとく赦し」（3節）原文では「すべての不義」です。神さまに対する不義、不敬はもちろんですが、わたしたちが日々の生活において犯す小さな過ちまで、人間のあらゆる罪の現実が赦しの対象になっています。マタイによる福音書に主人に一万タラントンの借金をしているしもべが借金を帳消しにされた話があります。一万タラントンというのは返済不可能な負債のことです。神さまにすべての罪を赦されたということは、そのように決して赦され得ない負い目

を全部帳消しにされるということです。『ハイデルベルク信仰問答』では、わたしが何一つ罪を犯したことも、罪人であったこともなかったようにみなしてください (問60)。なかったものとしてくださる。これは日々負い目を感じて生きていくのとは大きな違いがあるのではないのでしょうか。人に対しても負い目を感じて生きるのは辛いことです。まして神さまの御前に、人生において膨れ上がった罪の負債を抱えて、最後これをどう清算すればいいのか。そのことを考えたら、わたしたちは死ぬに死ねません。でも神さまはすべてなかったことにしてください。すべて赦してくださいのです。

しかし、それは罪をうやむやにするということではありません。神さまはこの罪の責任をわたしたちではなく神さまの独り子イエス・キリストに負わせられました。パウロの書簡に「罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断された」(ローマ8:3)とあります。この赦されざるわたしたちの罪を赦すために神さまの独り子がわたしたちと同じ人となられ、十字架で死んでくださいました。罪を罪として処断された。それによってすべての罪の清算が終わり、わたしたちは赦されたのです。

それだけではありません。キリストは三日目によみがえられ、この罪と死に勝利されました。もはや罪に支配されない新しい命をわたしたちのために備えてくださいました。それがキリストの十字架による罪の贖いとよみがえりによる新しい命です。パウロは「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています」(ローマ6:6)と言います。わたしたちが洗礼を受けてキリストに結ばれるということは、罪に支配された古い自分が十字架で死んで罪が清算され、さらにはもはや罪に支配されない新しい自分として生き始めることに他なりません。キリストのよみがえりの命に満たされて生きる新しい人生がそこから始まります。それが「長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください」(5節) ことです。

キリストの救いが3～5節にあるこのすべての動詞「赦し」「癒し」「贖い出し」「冠を授け」「満ち足らせ」「新たにす」を指し示していることは言うまでもありません。「冠を授け」はもう少し説明が必要です。これは原文でも「冠を置く」ということです。その冠とは「慈しみと憐れみの冠」です。慈しみ(ヘセド)は変わらない神さまの愛のこと。そして罪深いわたしたちを憐れんでくださる神さまの深い憐れみを頭にかぶる。ある注解書では「囲む」と解釈することもできるとありました。神さまの慈しみと憐れみで包まれて生きる。一体となる。それは洗礼と理解してよいでしょう。キリストに結ばれる時、神さまの救いがわたしたちの生き方に結びつくのです。信仰は決して絵空事ではありません。わたしたちもまた赦しに生きる。憐れみに生きることができる。それはキリストに結ばれ、その命に満たされているからこそ可能なことなのです。